

動物飼育Q & A

＜Q＞大戸小学校では、ヤギが子ども達に影響を与えていたようですが、やはりヤギが子どもには良いのでしょうか？

＜A＞毎年、動物飼育に関する作文を100編以上読んでいますが、それを見るとヤギは大型の哺乳類ですので、存在感がおおきいようです。

飼育が順調で、子どもたちが体を使ってヤギと遊べる環境があれば、子ども達への影響は大きく、ヤギが死んだ後で、「とても悲しかったので、これからは、頭にきてもとても『死ね！』っていません。」と作文に書いたほどです。

しかし、愛情を示す飼育は動物が死ぬまで飼い続けることが条件ですが、ヤギの寿命は17年で、糞尿の量も多く、敷き藁をつかえばなおさら毎日の世話に体力が必要です。土日の世話も勿論欠かすことはできません。また食べさせる草が豊富でないといけなんでしょう。また、大戸小学校はヤギ舎にクーラーとヒーターも備えています。

つまり暑さ寒さを防げるしっかりした飼育室と、保護者や地域の人々の支援体制、そして草地があれば、お勧めですが、多くの場合、それらは得られず、手間がたいへんな動物として、文部科学省配送のマニュアルにもヤギは収録しませんでした。ヤギを飼わないでも、チャボやウサギ、またモルモットで十分に効果はきたいできます。大事なのは子どもと動物を親しませることです。

＜Q＞保護者に休日の飼育を分担してもらうのは、どのようにしたら良いのでしょうか？

＜A＞土日の飼育を大変だから、保護者に支援してください、と発信しても保護者は嫌がるでしょう。また一度支援すると子どもが卒業するまで6年間も支援しづつけるとしてら、どなたでも名乗り出られません。

保護者の支援を得るためには、飼育活動の意義を確認して、「わが校の方針として、いのちの教育、心の教育、生物教育の基礎として、飼育活動を小学校6年間のうち全員が一年間関われるように、学年全員が飼育活動にあたります。それについて、土日の世話が必要ですが、教員は休みなしになると、体力が持たないため、親御さんがお子さんと一緒に交代で世話を分担して、『命には休みがない』、ということをお子さんに行動で伝え

てください。」と、春の保護者会で、飼育学年の親御さんに、校長先生、学年主任とそれぞれに訴えてください。「わが校の教育方針」として飼育活動を紹介できれば、その学年の親御さんたちは手伝います。一年間ですから、3クラスもあれば120家族もありますので、年に数回しか機会はありません。

親子当番の飼育日誌に見る親御さんの感想は、「楽しい」「子どもがなぜ動物を気にするか分かった」「子どもに感謝された」「子どもと楽しく話しあうことができた」と記され、良い親子の会話を誘っていることが分かります。楽しみを分ける感覚で紹介してみてください。

なお地域のボランティアの支援について、うっかりすると動物好きな方が何年も続けて支援するため、動物に関して学校を支配するようになり、最後は「動物がかわいそうだから、子供にさわらせない」などと言い出すことがあります。動物より子どもが大事と思う人に支援を頼むのが安心で、それはやはり保護者でしょう。

＜Q＞鳥インフルエンザが、またマスコミで取り上げられています。学校では鳥を飼わないほうが良いのでしょうか？

＜A＞鳥から鳥への感染で高病原性のウイルスが発生するには、同じ鶏舎で何ヶ月も感染が続くことが必要で、何万羽もかっている鶏舎だからこそ、その危険性が生じます。飼育数がすくない学校ではすぐに鶏が全滅してしまうからウイルスの感染が何ヶ月も続けません。つまり学校で高病原性のウイルス発生について、専門家である獣医師はだれも心配していません。

尚、人への感染が続くことで新型インフルエンザが発生しますが、この感染が全くない現在の日本で、人の新型インフルエンザが発生する危険はありません。現在の鳥インフルエンザ対策は、人への感染が続いている外国で発生するであろう新型インフルエンザが日本に入ってくるのをいかに防ぐかにあります。つまり人同士の病気予防の問題になっています。

学校の近くの獣医師が騒ぎ出したら学校の鳥を心配すれば良いので、今は安心して、鳥類の代表としてかわいがり、児童に生物の基礎体験と知識を与えてください。

六年の町井瑠奈さんははにかむ。

飼育担当の佐藤洋子教諭は「性格が荒っぽかった子が、ウサギは弱い動物だと知って優しく接するようになったり、いやいやだった子が進んで世話をするようになったり。いくら言葉で『命は大切』といっても効果はない。命と触れ合う実体験が必要なんです」と、動物を生かした情操教育のメリットを強調する。

町が契約した専属獣医師の存在も大きい。佐藤教諭は「安心して飼育ができます。『耳に何か付いている』『足のつめの間から血が出ている』などと子どもも健康状態を細かく確認するようになりました。子どもの観察力は大人以上」と言う。

五年女子の母である岡本きよみさんは動物飼育教育の効用を実感する保護者の一人。「入学したばかりのころは怖くて近づけなかった娘が、今はすっかり夢中になり、一匹一匹の性格を説明するまでになりました」。

学校での飼育が自信になり、自宅でも犬を飼い始めたという。「責任感を持って世話をしています。勉強は二の次でいい。心の優しい子に育ってほしい」と目を細める。

動物の飼育が思いやりをはぐくむとする声は多い。継続することで、じわりじわりと効果が出ることを学校も保護者も実感している。

○下野新聞 朝刊 2008年1月18日(金)

栃木県『学校で動物飼育 心の教育に効果』 宇都宮大学でシンポ

「学校教育における動物教育に関するシンポジウム」(県獣医師会主催)が17日、宇都宮市峰町の宇都宮大で開かれ、子どもたちの心を育てるための動物飼育の在り方などについて専門家らが講演した。県内の獣医師や幼稚園・保育園、小学校の動物飼育担当者ら約230人が参加した。

東京大の唐木英明名誉教授は「社会性を養うためには動物と触れ合う豊かな経験が効果的」と説明。全国学校飼育動物研究会の中川美穂子事務局長も「思いやりや洞察力が育つ」と協調。「そのためには普段から継続して動物とかかわることが必要」として、学校での動物飼育の留意点などを例示した。

宇都宮大農学部部長の長尾慶和准教授は、大学の家畜を活用して行っている小中学生の体験学習の効果について紹介。「動物や科学への親近感や興味が深まる」とした。

県教委の委託を受けて県獣医師会が実施している学校支援活動の報告も行われ、矢部真人副会長は「『命は一回しかない』ということを通して子どもたちが学んでもらえれば」と訴えた。

